特別支援教育の扉 №１５２　　令和７年７月22日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「保護者に伝えたいこと」

１　子どもは安心したい

・親が焦り、苦しさを感じると、子どもはそれ以上にそれらを感じて不安になる。親の態度や声の掛け方、家庭の雰囲気というのは、親が思っている以上に子どもの精神状態に大きな影響を及ぼす。家では、おおらかな気持ちで接することを心掛け、子どもが安心できる場所、間違っても許される場所にする。

・子どもは、大人が怒っている姿や大きい声を出している姿を見ると不安になる。家では、人に聞こえる最も小さな声で、ゆっくり穏やかに話す。想像以上の効果がある。

２　子どもは怒らないでほしい

・子どもは親のちょっとした否定的な態度（ため息をつく、しかめ面をする、無視をする）で落ち込む。特に小学校高学年から中学生は、自分が周りからどう見られているか気になってくる時期であり、一番近くにいる親が自分をどう思っているのか、どう評価しているのかを気にして親の一挙手一投足に敏感になっている。子どものことで必要以上に不安になるのはやめよう。子どもは親に心配してもらいたいのではなく、笑顔でいてほしいものである。

・子どもが小さいときは、注意すればするほどその行動が増えることがある。子どもができないことではなく、できていること（親がやってほしい行動）に注目して声を掛けると、その行動は増える。

３　子どもは信じてほしい

・「見ない、待てない、気付かない」というのが、不安の強い親の特徴である。まずは、子どもの目を見て、子どもの声を聞くことから始める。そして、子どもを信じて見守ること、大事なことはそれだけである。親が笑顔でそばにいるだけで子どもは安心し、穏やかになり、自分の言いたいことを伝えられるようになる。世間の目よりも、子どもの目を見て、子どもの声を聞く。

４　子どもは受け入れてほしい

・「これをやりたい」というモチベーションよりも、「親にほめられたい」というモチベーションのほうが優先順位の上にならないように、子どもがやっていることがすごいと思ったら、上から評価するのではなく、対等な目線で「すごい」「よかったね」と感心する。

・期待よりも応援というスタンスがよい。期待しているという言葉には、言っている側が描いた理想や希望が込められていて、それを子どもに押し付けている。応援しているという言葉は、言われる側が主人公である。子どもを横で見守っているイメージである。親がそばで笑っていること。それが何よりの応援となる。子どもに期待する喜びよりも、子どもを幸せにする喜びを大きくする。　**参照：「子どもが本当に思っていること」精神科医：さわ**

とれたて直送便

「保護者面談の進め方のポイント」

①来校してくれたことに感謝の意を表す（最後も）、②最初に１学期の子どもの頑張りを伝える（縦の変化）、③保護者の願いを丁寧に聞き取る（受容）、④家庭の様子を尋ねて保護者の頑張りをねぎらう（共感）、⑤学校での目標と手立てを具体的に説明する（情報共有）、⑥２学期の取組を確認する（合意形成）。保護者の話を聴くことは、①子どもの情報や保護者の心情を知る、②保護者の存在を肯定する、③保護者と良好な関係をつくるなど、一石三鳥である。気まずいことも聞ける、言える関係を構築する。